

原爆文学研究会報

第三三三号

原爆文学研究会 二〇一二年二月

白熱教室 言葉の海に漕ぎ出したばかりの娘。この子に何をどう教えるかが私の目下の課題だ。ご飯の時は座って、の座るは理解できないのかしたくないのか。オンガクアリガトーなんて回転しながら叫ぶ様子を見るにつけ、母にはわからぬ。勿論わかることもある。NHK教育テレビが大好き。そこから多種の文句をパク。ケイカクとかナカナカとか報告するのはそのためだ。レキシヤセンソウなどという言葉はまだ遠くにある気もするが、突然パクって親を慌てさせるのかもしれない。セイギって何？ゲンバクのセキニンって？少なくとも私には、来し方より説明を試みる義務があるように思う。これまで鈍くさく考えてきたこと。考えるほどにこんがらがって、一抜けたとはいかないこと。ときに考え続けるといのはポーズにすぎず、ほかのいろんな事柄を無視する言い訳とも思えてくること。それでも、今この場所で満腹・平穩に重ねている日々と切り離せない何かがある時君のお腹にもずしんと響くのかもかもしれない。つけっぱなしのNHKで始まったマイケル・サンデルの白熱教室。台所にて漏れ聞くとところ、「今のアメリカの世代は原爆に責任を持つと思うか？」「オバマは謝罪すべきか？」と立て続けに問うているらしい。驚くべきは、聴衆の応答の早さだ。この人アメリカ人よねえと独りごちる間に、東大安田講堂は挙手の波。賠償や謝罪をすべきと発言が続く。私は彼が一つ目の問いで、目前の人々と関係づけられる大変困難な立場に臨んだものと思ひこんだ。が、その席には電光石火でバラク・オバマが据えられ、大多数の聴衆はスムーズに、コミュニケーションの日本代表として現アメリカ大統領を標的とした。教授が「日本も謝罪すべきと思わないか？その上で米国も謝罪すべきでは？」と水を向け、学生が「お互いに謝罪すべき」と受ける



展・結はある意味見事だ。二歳児もうなずく喧嘩両成敗。なにも議論の練習に原爆を使うなどは言わないが、他人事でないかのような素振り、対話の真似ごとで気持ちよくなるな。私はここに、迅速円滑な応答を目指さず、二択を迫る者には臆せず質問返しすることを誓う。そもそも原爆の何がどう不当だったのか？誰が誰に謝るべきで、それは今、貴方のお腹にずしんとくる問題なのか？（畑中佳恵）

第三三三回 原爆文学研究会報告

二〇一〇年一月二十五日（土）、九州大学西新プラザで開催した第三三三回研究会には約二〇名が参加。

福間氏の発表に対しては「栗原貞子と山田かんの編集者としての側面に注目することによって何が新たに覚えてくるのか」等の質疑がありました。

村上氏の発表に対しては「祭の場」の改稿過程を追っていくことで「記録」と「小説」の関係をより具体的に追究することができるとは「ないか」等の質疑がありました。

合評会では野坂氏からの報告を受けて「原爆文学研究史におけるトリート本の意義」等について討議しました。

◇ 研究発表1

「被爆体験」の輿論史とローカル・メディア

福間 良明

本報告では、広島・長崎の新聞・文芸誌言説を扱いながら、被爆体験をめぐる輿論史について考察した。

戦後初期には、広島と長崎ではともに、原爆被災日には祝祭イベントが見られたが、その背後にあるものはやや異なっていた。広島は、当初から市の関連団体が平和祭開催に関わっていたが、長崎の場合、市や県の関与は限定的であり、広島に比べれば規模も小さかった。そのことは、広島に対する長崎のコンプレックスを生み出した。その累積の延長に、長崎国際文化都市建設法施行（一九四九年）に伴う祝祭イベントの盛り上がりがあった。

広島では、一九四七年の平和祭が盛り上がりのピークであったが、その際、市民の批判も少なくなかったことから、その後はいくらか抑制傾向が見られた。それに対し、長崎では最高潮に達したのは、一九四九年のイベントであった。そのタイムラグには、広島に対する劣等感が累積され、それが一気に噴出する形で、「八・九」イベントが挙行された事情が浮かび上がっていた。

長崎における広島コンプレックスは、その後もしばしば見られた。戦後約十年のあいだに、広島では原民喜、大田洋子、峠三吉、栗原貞子らによって、被爆体験を素材にした文学が多く生みだされたが、長崎では浦上のカトリックのイメージと相まって、永井隆の存在が



福間 良明 氏

際立っていた。GHQの占領が終結し、原爆を「神の摂理」とみなす永井の議論への違和感があらわれるようになる。こうした広島との差異は、長崎知識人に広島に対する劣等感をかきたてることになった。

もつとも、『芽立ち』『地人』といった長崎文芸誌には、従来の見方を問いただす論点も少なからず見られたが、そのことよりも、広島に対する後進性が多く語られた。

だが、それは一九六〇年代末になって、長崎での議論を活性化することにつながった。広島に比べて立ち遅れているという意識は、長崎の体験記録を収集する必要性をつよく意識させた。そこに、佐世保へのエンタープライズ寄港や核をめぐる沖縄の問題が重なる中で、『長崎の証言』が創刊された。これは定期刊行を意図した雑誌メディアであっただけに、継続的な証言記録の収集がつよく意識されていた。この雑誌は、長崎で議論を活性化させたばかりではなく、広島にも働きかけ、共同で体験記録集を編纂したこともあった。広島・長崎証言の会編『広島・長崎30年の証言』（一九七六年）や、『季刊ヒロシマ・ナガサキの証言』（一九八二年創刊）がその例であった。その意味で、少なくとも一九七〇年代においては、長崎が広島をリードする傾向も見られた。

そのほか、体験と政治主義と世代の関係性が広島・長崎の場合と他の戦争体験の語り（沖縄戦体験論、戦後日本の戦争体験論など）とどう異なるのか、そこでいかなる論点が焦点化され、また、後景に退いていったのかについて報告を行なった。

文体と出来事の記憶

——林京子「祭りの場」について

村上 陽子

林京子は「祭りの場」(一九七五年)で第一八回群像新人文学賞、第七三回芥川賞を受賞した。両賞の選評をみると、「祭りの場」の未整理な箇所や荒削りな言葉に関して評価が分かれていることが明らかとなる。それらは拙劣さとして批判される一方で、作品の魅力としても捉えられていた。

発表ではまず、「祭りの場」の語りについて考察した。林は自身の体験を主軸としながら、記録や文書、他者の体験を参照することによつて長崎への原爆投下という出来事の全体像を描き出すことを「祭りの場」で試みていた。語り手の「私」に視点を限定せず、記録と体験、爆心地の内と外を往還する定位置を持たない語りの中に、出来事が浮かび上がってくる。また、被爆から三十年を経た「現在」の「私」の視点も作品の随所に見いだせる。それは長崎原爆を一九四五年八月九日という歴史の一点に縫い止めず、戦後の時空間についていく効果を持っている。継起が寸断される不自然さを読者が感得するとき、戦後の時空間を生きながらも常に一九四五年八月九日に引き戻されていく「私」に共振する可能性が生まれるのではないだろうか。「祭りの場」の語りおよび時間軸の定まりのなさは、被爆体験のない読者を出来事の内部に引き込む力として機能していると言えるだろう。

発表の後半では、語り手の「私」の精神に食い込み、深い傷を残



村上 陽子 氏

した記憶について触れた。「私」は逃げ延びる際、瀕死の男の怨念の言葉を聞き取ってしまった。原爆投下直後、そこにいるすべての人間が「被爆者」である状況において、「恨み」は「薄紙より際どい」生を生き延びた人間に向けられた。それは、原爆が人間の肉体を破壊するのみならず、人間同士の絆に亀裂を入れる暴力でもあったことを示している。ぎりぎりの状況で「恨み」を発した人々の声は、それを聞き取ってしまった人間に傷を残し、沈黙させる。しかし「恨み」の言葉が「被爆者」として生き残った人々に傷を残すのとは対照的に、「恨み」に直面せずにすむ人間も存在した。昭和天皇ヒロヒトは、戦争責任を問われることなく、「神」から「人間」への転身を果たして戦後を生き延びた。彼は戦前戦後を通じて、自らに「恨み」の言葉をぶつける他者と対面せずすむ立場を確保しつづけたのである。「恨み」を聞き取ることで深い傷を負った「被爆者」の存在と、そのような痛みから免れつづけたヒロヒトの存在が対比されている。

林は自身の体験のみでは語りきれない箇所を記録によつて補い、読者に出来事を伝えようとした。それでもなお、読者には理解できない領域が残される。だが、理解できない領域があるからこそ、原爆を語る言葉が積み上げられていかなければならないことを「祭りの場」は示していると言えるだろう。そのような営みを一貫して無視してきた存在としてヒロヒト「その人」はこのテキストに呼び込まれている。

質疑では多くの方々から貴重なご意見を賜った。ここに記し、心から感謝申し上げます。

彙報

第三三回 原爆文学研究会

○日時 二〇一〇年二月二十五日(土) 一二時半より

○会場 九州大学西新プラザ中会議室

○研究発表

「被爆体験」の輿論史とローカル・メディア

福岡 良明

文体と出来事の記憶——林京子「祭りの場」について

村上 陽子

○合評会

ジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く』

——日本文学と原爆』

報告 野坂 昭雄

機関誌 「原爆文学研究」 第一〇号原稿募集

「原爆文学研究」第一〇号を二〇一一年二月に発行いたします。

左記の要領で原稿を募集いたしますのでふるってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一一年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付して

の投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、

一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一一一九三 佐世保市沖新町一一一

佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

編集後記

第三三回研究会は、二本の研究発表に加えて昨年発行の翻訳書の合評会も行ったため、通常よりも長時間の会になりました。研究発表については発表者による要旨の通りですので、この場を借りて合評会について少しご報告したいと思います。合評会では、監訳者の一人である野坂氏から、この本の中で言及されている「八〇年代における世界的な核言説の再編」が、トリートがこの本を書いた大きな契機になっているのではないかという問題提起がされました。その後「トリートは原爆を描いた米国のSFを日本の原爆文学より劣ったものと見ているようだが、そのような評価の仕方は妥当か」「『グラウンド・ゼロを書く』は米国でどのように読まれたのか」「トリートが「全体性」を志向する原爆文学を高く評価していることをどのように評価するか」「原爆について日本語で語る際の主語の曖昧性をどのように考えるか」等の問題について全体討議を行いました。

原爆文学研究会も十年目。会報も少しだけですがリニューアルしました。まず、巻頭エッセイを畑中佳恵氏に依頼。切れがあるエッセイをご寄稿いただきました。もっと早くお願いすればよかった。発表者のお写真も了解を得て掲載。「顔が見える会」を目指したいと思えます。次回研究会は、二〇一一年五月開催予定です。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>